

## 入試の季節

浅海重夫

今年も又入学試験の季節が来て、あわただしく過ぎていった。しかし大学の教師は、受験生よりも高校教師よりも、親たちよりも文部当局よりも、緊迫感が少いように思われる。一方、多忙なくせにわが世の春を謳歌している受験産業界もある。

共通一次試験の存続可否論議や方法の再検討がされているが、中教審は手直しの上続行する見解を示しているらしい。マークシート方式などの問題点をとりあげて批判した首相の発言をきいて、日頃あまり親しみをもたなかったこの人にこればかりは共感した。元来国公立大学の共通一次のねらいは、生徒の受験対策に向けられる過剰の労力を軽減させるため、高校の授業内容のある水準までの到達度で足切りをし、それ以上の点数の相对比较で優劣を競わせるのをやめようということにあったと思う。そして二次試験では生徒の学科目に対する適性をみることがよいではなかったか。しかしどうもそうなってはいない。点をとるほど合格できる状況にあり、結局労力は倍加されてしまったと言える。

大量の受験者に同日一斉の試験をするにはマークシートしかない、筆記解答方式や思考過程をみる設問では答え調べに時間がかかって大変だから、という。つまり試験を課する側の便宜都合が優先している。二次試験では、例えばお茶大文教育学部の場合、11の学科で一律に英語と国語を課し、作文や面接で志望傾向や意欲について問うことは、他学部も又恐らく全国どの大学でもほとんどやらない。時間がかかって面倒なのと、公平な評価が難しいという理由。しかし1点きざみの点差で合否をきめ、その差が公正な判定になるとする考え方の方がおかしい。かりに何人かの良い者が落され、劣る者が入ってしまったとしても、そ

の不公平よりもこのような受験競争で人間性の向上を犠牲にされたり、エスカレーターに乗っていれば安泰に人生を送れるという自主性の乏しい人間を作り出す教育システムの問題の方が重大ではなからうか。

こんなことを考える大学教師が何人もいるのは確かだが、さて大学として入試方法を論ずる教授会となると意見は多様で、決してまとまりはしない。そして保守的で変革をきらう。もし悪い結果が出たら変化を提唱した者はどう責任をとるのかという議論の方が強い説得力をもっている。

共通一次以後の学生は様変わりしたという声がある。変わり方もいろいろあって皆共通一次との因果論で片づけることはできないが、例えば卒論のテーマを自主的にきめられない学生がふえたとの見方は、その批評の根拠の1つになろう。またこんな例もある。一般教育科目の総合コースは、全学の各学科から教官が適宜選ばれて専門の立場でひとつのテーマについて講義し、初学者に物の見方や考え方の多用性を教え、様々な分野の知見を語ろうというもの。ところが学生の中には、自然・人文・社会の3系列から2系列の2講を選んで学年末に試験をうけるとのしきみを最大限利用して、最初から2つの講義だけをきいて試験に出て単位にするという手段を考える者が最近出はじめたという。これでは総合コースの趣旨は生かされない。

目的や趣旨はすぐれていても、運用が適切に行われなければ効果は生れない。そこにはルールや規制を実施する人間、そのルールの趣旨のもとに動く人間の問題があるように思う。共通一次の趣旨が生かされないのは何故だろうか、改めて考えさせられる。